

出会いは世界を広げていく

交流会を通して

新連載 第1回

土肥いつき DOHI ITSUKI

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

わたしの趣味は交流会

みなさん、あらためてはじめまして。今回新たな連載を担当させていただき土肥いつきと申します。わたしは京都の公立高校で教員をしています。教科は数学ですが、あまり得意ではありません。2021年に人間科学の博士号を取得したので、専門はどちらかというところと教育社会学、あるいは社会学になるのでしょうか。高校では長く人権教育を担当しており、かれこれ25年になります。ここ10年は校内の人権教育担当だけでなく、京都府立高等学校人権教育研究会の事務局もしています。人権教育にどっぷりとはまるきっかけは、部落出身生徒や在日外国人生徒との出会いでした。

日本性教育協会とおつきあいは、2009年4月からなので、もうかれこれ15年になります。その間、『現代性教育研究月報』に「いつきのつれづれ日記」を、『現代性教育研究ジャーナル』に「『ありのままのわたしを生きる』ために「『いつきの”ヒューマン・ビーイング”・人権について考える』という連載を書かせていただきました。これらの連載の中にも部落出身生徒や在日外国人生徒とのかかわりに触れたものがあります。ただし、わたし自身は性教育については素人です。にもかかわらず連載をさせていただいているのは、ひとつにはわたし自身がトランス女性であること、もうひとつは教員としてたくさんの失敗を繰り返しながらも、たくさんの被差別マイノリティの子どもたちと出会ってきたからだろうと思っています。

世間では、わたしがいろいろところで発言をしていることから、わたしのことを「活動家」と思っておられる方がおられるようです。しかし、わたし個人のアイデンティティは、まずは「学校教育労働者」です。同時に「研究者」でもあります。そして両者をつなぐものとして「実践者」というアイデンティティがあります。とりわけ「実践者」というアイデンティティは、これまでさまざまな「居場所づくり」にかかわってきたことに起因しています。

たとえば、京都で性別や性的指向／嗜好にとらわれないで語り合える場をつくっている「玖伊屋」には

1999年にはじめて参加し、現在はスタッフとしてかかわっています。2000年に立ちあがった「セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク」には設立集会から参加し、現在は副代表として関西地区でのセミナーの開催にかかわっています。2006年には関西医科大学ジェンダークリニック受診者の会である「まんまるの会」には立ちあげメンバーとしてかかわり、現在も世話人代表をしています。同じく2006年から「トランスジェンダー生徒交流会」の活動を開始しました。このようなセクシュアルマイノリティ系の集まりだけではありません。1994年に「京都・在日外国人生徒交流会」を立ちあげました。現在は「全国在日外国人生徒交流会」の運営にもかかわっています。また、2009年には「全国在日外国人生徒交流会卒業生の会」も開始しました。これらの中にはできた当初の勢いが少なくなってしまった集まりもありますが、ほとんどが現在も活動を続けています。

この中で「玖伊屋」「セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク」「まんまるの会」は対象が大人です。一方、「交流会」は生徒たちを対象としています。前者はピアな集まりということで、いわば自助グループということになるのでしょうか。後者は子どもを対象とする「居場所」で、たとえば「ユースサポート」ということができるかもしれません。ただ、わたしがおこなっている、マイノリティの子どもたちの集まりである「生徒交流会」は、一般的なユースサポートとは少々趣が異なるのではないかと思います。もちろん、活動内容は話しあいであったり、レクリエーションであったりと、ユースサポートでおこなわれる居場所づくりとそれほど大きな違いはありません。しかしもっとも大きな違いは、主催しているのは教員であるということだと思います。

そこで、この連載では交流会をするきっかけになったことや、交流会で出会った生徒たちのこと、そして交流会という場の「不思議さ」について書いていこうと思います。